

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

尾崎マリサ（スプツニ子!）

東京大学生産技術研究所特任准教授（アーティスト）

Marissa Ozaki (Sputniko!) /

Associate Professor at IIS The University of Tokyo (Artist)



CREATOR^{No} INTERVIEW 100

尾崎マリサ（スプツニ子!） Marissa Ozaki (Sputniko!)

1985年東京都生まれ。東京大学生産技術研究所特任准教授。東京藝術大学デザイン科准教授。ロンドン大学インペリアル・カレッジ数学部を卒業後、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）で修士課程を修了。2013年からマサチューセッツ工科大学（MIT）メディアラボ助教としてデザイン・フィクション研究室を主宰。RCA在学中より、テクノロジーによって変化する社会を考察・議論するデザイン作品を制作。最近の主な展覧会に、「Cooper Hewitt デザイントリエナーレ」（クーパー・ヒューイット、アメリカ）、「Broken Nature」（ミラノトリエンナーレ2019、イタリア）など。VOGUE JAPAN ウーマン・オブ・ザ・イヤー2013受賞。2016年 第11回「ロレアル - ユネスコ女性科学者 日本特別賞」受賞。2017年 世界経済フォーラムの選ぶ若手リーダー代表「ヤング・グローバル・リーダー」、2019年TEDフェローに選出。著書に『はみだす力』。共著に『ネットで進化する人類』（伊藤穰一監修）など。

尾崎マリサ（スプツニ子!）

東京大学生産技術研究所特任准教授（アーティスト）

MARISSA OZAKI (Sputniko!)

Associate Professor at IIS The University of Tokyo (Artist)

クリエイターインタビュー

『女性の新しい“生きやすいかたち”を描き出したい』

未来の問題をあぶり出し、今、やれることをやろう。

update_2019.1.23 / photo_mariko tagashira / text_tami okano

「理系女子アーティスト」として注目を集め、「スプツニ子!」の名で発表した作品が常に話題を呼んできた現代美術家、尾崎マリサさん。現在は東京大学生産技術研究所の特任准教授も務め、2018年12月に国立新美術館で行われていた東京大学生産技術研究所70周年記念展示『もしかする未来 工学 × デザイン』でも新作を発表しました。テクノロジーがもたらす未来への展望から、六本木に求めること、そして尾崎さんが目指す「女性が生きやすい世界」への思いまで。会場に訪ねて聞きました。

四つ葉のクローバー探しにみる「無駄」と「楽しみ」。

東京大学生産技術研究所の70周年記念展示『もしかする未来 工学 × デザイン』に出した作品は、『幸せの四つ葉のクローバーを探すドローン』。見つけたら幸せになれると言われ、0.001%しか存在しないというあの「四つ葉」を、人工知能を搭載した無敵の探査ドローンが見つかる様子を描いた短い映像作品です。

着想した場所は、東大の駒場リサーチキャンパス。駒場に、クローバーが群生している原っぱのような場所があるんですね。そこに座っておにぎりを食べていたら、ふと、「四つ葉のクローバーを片っ端から探してくれるドローンがあったら、世界中の幸せが手に入るのか!？」と思ったんです。東大の凄いところは、そういうアイデアを投げかけると、「そのプログラム、書けますよ」と快く引き受け、実現してくれる人がいるところ。実際に、画像認識で四つ葉を見つけるプログラムを書き、ドローンに搭載して見事、完成したわけですが、もちろん、これは、私なりのブラックユーモアです。

四つ葉のクローバーを探すのって大変だし、なかなか見つけれないものを探すという行為は、至極「無駄」だけれど、人間って、無駄のなかに豊かさを見つけることもありますよね。「無駄をなくそう」という言葉のもと、私たちはどんどんテクノロジーを使って効率よく仕事をするようになるんですけど、人工知能と労働、人工知能と効率性を考えるとき、もし、四つ葉のクローバー探しのような、人間らしい「些細な楽しみ」までもテクノロジーに任せてしまったら、いったい、何を喜びとして生きていくんだろう、と。

人工知能で上空から課題を一気に解決するっていうのは、幸せをこうすれば効率よく手に入れますよっていう、シリコンバレー批判でもあるし、ある種の滑稽さを、私は皮肉として作品に込めているんです。



『もしかする未来 工学 × デザイン』

東京大学生産技術研究所の、先端研究やプロトタイプが一同に介した展覧会。国立新美術館で2018年12月1日から12月9日まで開催された。尾崎さんと研究室のメンバーは実際にドローンに実装を行い、『幸せの四つ葉のクローバーを探すドローン』と題した映像を発表した。

楽観はしていないけれど、絶望もしていない。

仕事柄、みなさんから「今よりもテクノロジーが進化した未来の、"わくわくする姿"を描き出してください」というオーダーをたくさんいただきます。政府や企業の宣伝、広告的な意味では"わくわくする"もののほうがいいのだろうし、そのほうが、受け手側の気持ちとしてはハッピーかもしれない。でも、技術の進化がもたらす未来のいい面ばかりを見ていたら、とても危険だと思います。

デジタルでもバイオでも、いろいろな可能性が広がると同時に、いろいろな懸念材料も増える。技術者や研究者には、当然、その「負の可能性」も見えていて、未来との向き合い方や心持ちは、人それぞれだと思うんですね。負の要素そのものと戦おうとする人、未来に絶望しながらも一筋の光を見出そうとする人、いろいろいらっしゃると思うんですけど、私の場合は、今、やれることをやろう、です。

テクノロジーによって未来が良くなるとは言えないし、人類スケールで考えると問題は山積みです。今できることは、その問題をあぶり出し、解決法を考えること。嫌な未来も想像できるけれど、私も未来におけるひとりのアクターだから、綱引きみたいに、自分がいいと思う方向に、引っ張ることはできる。未来は自分がつくれる、という意識をもっているの、楽観はしていないけれど、絶望もしていません。

肩書きや名前はなんでもいい。

2017 年から東京大学生産技術研究所の特任准教授になり、「スプツニ子!」ではなく、本名の尾崎マリサでみなさんに挨拶をする機会が増えました。『もしかする未来』にも、作品は本名で出しましたし、東大では「尾崎先生」（笑）です。

そもそも、「スプツニ子!」は私の作品のひとつ。私が伝えたいメッセージを喋ってくれるペルソナであり、心強いひとりの「キャラクター」なんです。一方の私自身は、もともと、本当にヘタレで、プログラミングは大好きだけど友だちをつくるのはあまり上手じゃないし、人前に出ることだって得意ではなかった。だからこそ、「スプツニ子!」というキャラに自分ができないことをステージの上でやってもらっていたわけです。

そのキャラがいつの間にかメディアにどんどん出ていって、そこで知り合った人たちには、プライベートでもそのまま「スプツニ子!」でいなければならない。それは、ちょっとしんどいなあ、と。だから、最近新しくお会いする人には、大学以外でも「尾崎です」と名乗るようにしています。「スプツニ子!」という人は、もちろん今でも存在しています。と同時に、今後、私自身は、また違うペルソナをつくるかもしれない。私が思い描いている「いいと思うほうの未来」に綱を引くためだったら、その手段や肩書き、名前はなんでもいいんです。



東京大学
生産技術研究所

東京大学生産技術研究所

目黒区駒場などに拠点を持つ工学を中心とした研究所。尾崎さんは 2017 年 10 月に特任准教授に着任。デザインとエンジニアリングの融合によるイノベーション創出と、その活動を通じた人材育成(デザインエンジニアリング教育)にも注力している。



「スプツニ子!」

尾崎さんの現代美術家としてのアーティスト名であり、作品名。代表作に『生理マシーン、タカシの場合。』(2010 年)『寿司ボーグ☆ユカリ』(2010 年) ベネッセアートサイト常設展示の『豊島八百万ラボ』(2016 年) など。

© Sputniko!



尾崎マリサ（スプツニ子！） 東京大学生産技術研究所特任准教授（アーティスト）

MARISSA OZAKI (Sputniko!)

Associate Professor at IIS The University of Tokyo (Artist)

update_2019.1.23 / photo_mariko tagashira / text_tami okano

「わからない」ことが思考を刺激する。

ロンドンに長くいたので、ロンドンと東京での、テクノロジーやデザインに対する捉え方の違いについて聞かれることがあります。私が卒業した RCA（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート）を例に言えば、RCA には、世界中の学生たちが集まって議論をしてきた歴史があるので、AI ひとつとっても、さまざまな文化から見た、さまざまなコンテキストが存在する。世界には多種多様な社会課題があり、それに対する問題提起への意識は、東京よりロンドンのほうが高いと思います。

あと、RCA らしさというか、先日も感心したのが、プレゼンテーションの自由さですね。理系の人がプレゼンするときって、筋が通ったものしかスライドに入れないんですけど、RCA って、まったく意味がわからないものも入れてくる。先日もロンドンでのワークショップでモビリティの未来についてのプレゼンを受けたのですが、プレゼン前に、土の匂いのついた紙を渡されたんですね。それで、雨の音が流れてきて、何をするのかなと思ったら、結局最後まで、土の匂いにも雨の音にも触れない（笑）。スライドに折り込まれていた映像の展開も早いし、なぜそれがつながっているのか、言語化もされない。

RCA(ロイヤル・カレッジ・オブ・アート)

世界で唯一のアート・デザインの修士号以上の学問を扱う研究大学(大学院大学)。1837 年設立と歴史も古く、グローバルな舞台で活躍できる、次世代のアーティスト、デザイナーを育てる教育プログラムに定評がある。

それで思ったのが、プレゼンで「答え」を出されるとそのまま「理解」はできるんだけど、自分の頭の中は広がらない。それに対して、その謎だらけのプレゼンは、自分なりに考えさせられるというか、「わからない」ことで思考を刺激されたような気もして、プレゼンとしては、ただダメなプレゼンなのかもしれないけれど、個人的には、とても好きでした。

最近は東大にも留学生が増えていますし、「RCA-IIS Tokyo Design Lab」には RCA から
の学生もたくさん来ているから、国際的なマインドセットになっていて、とてもいい環境だな
と思います。技術力は高いし、優秀な学生も多い。それに加えて、私みたいな人を先生にし
てしまうんだから、どんどん変わってきているな、という印象があります。



「違う」ことを前提に、どうつながれるかを考える。

世界の都市の中で、クリエイティブだと思う街は、ロンドンです。あの街は、人がみんな「違う」ということを前提として、そこからどうつながれるかを常に考えている街だから。

ロンドンには 2003 年から 7 年間住んでいたのですが、ロンドンから東京に帰ってきて寂しいな、と思うのは、常にどこか、疎外感があること。あなたは特別だよね、とか、はみ出しているよね、とか、それは褒め言葉のようでいて、僕たちとは「違う」のだ、という拒絶感のようなものを感じます。

それに比べると、ロンドンって、それぞれの人種や文化的な背景をはじめ、個人的な価値観も思想もみんなが違いすぎちゃうから、「みんな違うよね。じゃあ、どうやってつながろうか」という発想がそもそものベースにあり、居心地がいいんですよね。日本にいと、永遠の「違う人」。しかも、つながろうとする努力があまり感じられない。

あと、ロンドンがクリエイティブだと思う理由は、自由に「実験」ができる場所ですね。何かを始めよう、というときに、お金をかけず、まずやってみることができる土壌がある。ライブのチケットも安かったし、美術館はほとんど無料だから、アートもいっぱい見ることができて、楽しかったですね。最初にロンドンにいったとき、自分の家はすごい小さかったけれど、テートモダンやデザインミュージアムを、私の家の拡張スペースだと思うことにしたんです。無料ですからね。そう思ったら、私の家はなんて広いんだ！と。

テートモダンとデザインミュージアム

テートモダン(Tate Modern)は、ロンドンにある近現代美術館。ピカソやダリ、マティスなどの作品が収蔵されている。デザインミュージアム(Design Museum)は2016年11月に新たにケンジントンに場所を移して誕生した美術館。創設者はテレンス・コンラン氏。

アーティストが実験できる、安くて完璧すぎない場所を六本木に。

六本木をアートとデザインの街にしたいと思うなら、アーティストが住んだり制作できるような場所をつくったらいいんじゃないかと思います。ものすごく家賃の安い部屋や空き家をアーティストに提供するだけで、もっとリアルなアートとデザインの街に変わるんじゃないでしょうか。

というのも、やはり、本当のアート&カルチャーって、若い学生や若いアーティストから生まれているという感覚が私にはあって、ロンドンでも、物価が安い東ロンドンの倉庫に若い人たちが10人でシェアして住んでいたり、廃墟を占拠して活動しているアーティストがいたり、そういうアンダーグラウンドなところにリアルなアート魂があると思っていますよね。

何か新しい表現をしたいとか、アーティストとして生きていきたいと思ったときに、お金持っている人なんて、財閥の娘や息子くらいしかいないじゃないですか。私も25歳で帰国したときは超貧乏で、こんなに物価も家賃も高い六本木には来る機会がほとんどありませんでした。六本木って、高収入の大人がアートを観たり買ったりするにはいいかもしれないけど、若いアーティスト側からすると、近寄ることすらできない街なんですよ。

もし、六本木に、若いアーティストのための場所ができるんだったら、みんなが雑魚寝できちゃうような、適当な感じがいいですね。あまり整いすぎてなくて、適度に汚れているくらいのほうが、いろいろな実験がしやすいと思います。例えば、壊す前のビルがあれば、先着順で好きな展示してもいいですよ、とか。キレイすぎない、キラキラしすぎない場所。六本木はある意味で完璧を求めているのかもしれませんが、むしろ、「完璧すぎない場所」が欲しいのと、あと、お金のない若者に、ぜひ親切にしてほしいって思います。

尾崎マリサ（スプツニ子！） 東京大学生産技術研究所特任准教授（アーティスト）

MARISSA OZAKI (Sputniko!)

Associate Professor at IIS The University of Tokyo (Artist)



update_2019.1.23 / photo_mariko tagashira / text_tami okano

六本木から女性が生きやすい世界に。

最近になって、あらためて自分のなかで確信をしたのですが、私には「達成したい未来」があって、その未来とは、女性がもっと生きやすい世界になること。それを六本木から発信できればいいですね。

私は女性として生まれて、理系で、いろいろな夢や大志を抱きながらも、日本で生まれ育ちましたが、残念なことに、上の世代の女性の研究者は少ないし、女性の政治家も少ないし、管理職も少ない。学校では、男の子も女の子も夢をもってがんばっていいんだよ、と言われるのに、その先には未だに、女性は結婚したら家事育児をするものだという社会通念がある。2018年には東京医大の試験で女性を一律減点していたという事実が発覚しましたが、日本の女の子たちは、女なのに医者になるの？ 女なのに勉強をするの？ という偏見を乗り越えてがんばってきたのに、大学にまで差別されるなんて、信じられないような人権問題です。

その偏見や性差別の問題は、日本人の女性だけではなく、ロンドン時代に知り合ったアジアの女性たちが共通して抱えていたことでもあって、アジア文化に根付く結婚観や夫婦観は、どうしても、女性が男性を支えるというイメージがある。女性が活躍、いいじゃん！ と言いながら、結婚した相手には、俺を支えるもんだろ、というのが染み付いている気がするし、女性とは、俺より弱く愚かなもの、みたいな。例えば、テレビでキッチンのリノベーションの紹介をするときに、「こんなに使いやすいキッチンなら、奥様も喜びます！」って、妻しかキッチン使わないのかー！ とか。

そういう価値観を恐れるがあまり、パートナーを見つけられない女性たちも多いと思います。でも、妊娠出産のタイムリミットだけは変わらないので、戸惑っていたり、忙しくしていたら、あっという間に、いつ産むの？ 誰と産むの？ 産めるの？ ってことになる。

女性をバイオロジーから解放したい。

未婚女性が卵子凍結をすること自体がまだタブーだと思われるけど、卵子凍結や精子バンクの分野にも興味があるし、新しい家族像の構築にも興味があって、女同士だけで子どもを育てるという選択だってあるかもしれない。もっともっと、女性の新しい「生きやすいかたち」を描き出し、発信することで、現代女性が抱える苦しさを少しでも減らしたい。究極的には、私は、女性をバイオロジーから解放したいんです。

その目標がはっきりしたので、今、アーティストとして「テクノロジーでわくわくする未来を描いてください」というオファーは全部、断わっています。もうね、そんな、"わくわく"を描いている場合ではない！ 性差別に関する分野からは、誰からも仕事のオファーは来ていないのだけれど、頼まれたからやるのがアートではないし、女性が解放されるというのは、政治家や大企業のおじさまたちには見たくない未来なのかもしれないけれど、未来は自分がつくるもの。私は、私が望む未来に向かって、全力でやっていきたい。

実は今、起業も考えているんです。この分野の根強い問題がアジアに共通するものであるなら、アジア全体を視野にできることはたくさんあるはず。「尾崎マリサは極端なことを言っている」と思われるかもしれないけど、それはそれで、いいと思っています。私がちょっと極端なことを言ったり、極端なことをやれば、議論や選択の幅が広がりますよね。「あの人が言っているところまではいかないけれど、私も、ここくらいまではいけるかな」と、女性たちが一歩先に進めるようになるだけでも、意味があるのではないのでしょうか。

取材を終えて

街ですれ違ったら、尾崎マリサさんその人と知らなくとも思わず振り返ってしまう美しさ。と同時に、話を聞けば聞くほど伝わってくる、意志の強さ。「スブツニ子！」なのか「尾崎マリサ」なのか、アーティストなのか、研究者なのか。「私には達成したい未来があり、そのためなら名前や肩書、手段はなんでもいい」。そう言い切る潔さも印象的でした。「女性がもっと生きやすい世界」に向けて。これからますます広がっていくであろう尾崎さんの活躍が楽しみです。(text_tami okano)